〔原著〕

発達障害児の成長発達を支える家族支援のあり方　その２
―家族支援の課題解決に向けた実践を通じた追究―

堀 里奈　北山 三津子

Family Support Methods for the Growth and Development of Children with Developmental Disabilities and to Meet Family Needs (Part 2): Pursuit through Practice to Solve Family Support Issues

Rina Hori and Mitsuko Kitayama

要旨

本研究の目的は、就学後１年までの時期に焦点を当て、発達障害児の成長発達を支える家族支援のあり方を明らかにすることであり、本稿では、第１報で明らかになった家族支援の課題解決に向け、支援の方向性や改善の具体策の検討を含めた実践過程を通して、発達障害児の成長発達を支える家族支援の方向性と、保健師の役割を検討した。

X 市の発達障害児者支援を担う部署の職員（以下、グループ職員）とともに、家族支援の課題解決に向けた支援計画・実施・評価、および、課題解決に向けた職員向け学習会を行った。その後、成果把握としてグループ職員への聞き取りを行った。

支援の課題解決に向けた意見交換から、≪ペアレントトレーニング事業がニーズに合っているかを検討し、参加者同士の関係の継続も目指し改善できるとよい≫≪求めていることを確かめて活動を考えたいが、子の状況や家族の思いが十分に分からない≫≪利用できる資源の情報提供の工夫や強化が必要≫等が整理され、この内容をもとに筆頭筆者が支援案を考案した。支援案は、既存のペアレントトレーニング事業改善（支援 A）、サポートブック交付時の個別支援充実（支援 B）、発達支援に関する情報提供強化（支援 C）であり、支援 A は実施・評価を行った。支援 A では、参加者同士の関係が作られつつある状況が確認され、職員が捉えた参加者やその家族の状況を共有した。成果把握からは、参加者のニーズや変化を捉えながら支援方法を考えた、サポートブック交付時に必要な支援についてさらに検討が必要等の意見が確認された。

発達障害児の家族支援の方向性として、療育開始前後に家族の状況を丁寧に捉え支援できる体制、家族間の交流を意図した支援を検討する機会が考えられた。保健師は課題解決に向けて、原則的な活動の視点を生かし、協働する多職種の専門性や課題意識を捉え、支援上の課題や目的を互いが認識して検討できるよう調整する役割が重要と考えられた。

キーワード：発達障害児、家族支援、家族支援の課題

Ⅰ．はじめに

平成 28 年改正の発達障害者支援法では、発達障害児・者とその家族への支援が切れ目なく行われるための国・県・市町村の責務が明記された。その中で家族支援については、適切な対応をすることができるよう関係機関と連携を図り、相談、情報提供、助言、発達障害者の家族が互いに支え合うための活動支援を適切に行うよう努めなければならないとされている。関係機関と連携した具体的な支援方法の検討には、これまで各機関で行われてきた支援内容とともに、その地域で発達障害児を育児してきた家族の経験や思いを捉え考えていくことが重要である。本研究第１報（堀ら，2021）では、X 市役所の発達障害児者支援を担当する部

岐阜県立看護大学 地域基礎看護学領域　Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

署（以下、グループ）に配属されている保健師、保育士、臨床心理士等の専門職や事務職員（以下、グループ職員）とともに、発達障害児を育てる家族からニーズ捉え、ニーズに対応する支援となっているか振り返り、支援上の課題を整理した。課題は、「乳幼児期からの継続支援体制づくり」「父親・祖父母に理解や協力を促す支援方法の検討」「身近な専門職による療育の促しと継続支援の検討」「相談支援専門員による支援の現状把握」「就学前後の支援充実と学校への働きかけの継続」「家族の交流の機会の充実」「家族が子を理解するためのサポートブックやペアレントトレーニングの検討」「家族の思いや現状の把握」「関係機関と協働した支援体制づくり」の9つに整理された。これらの課題は、乳幼児期からの継続支援体制、療育継続のための支援体制、家族が協力して育児をする基盤を整える支援体制等、発達支援や子育て支援の体制に関わる大きな課題、同じ悩みをもつ家族の交流の継続・発展、サポートブック活用といった具体的な支援に関わる課題、家族の思いや現状の把握、相談支援専門員による支援の把握といった、実態をさらに捉える必要性など多様な内容が挙がった。

同じ悩みをもつ家族間の関わりは、国の発達障害者支援施策において、発達障害児者の家族同士の支援推進を目指し、都道府県のみならず市町村でもピアサポートやペアレントメンター活動の推進が示されており、X市でも様々な機関の支援で、家族同士の関わりの場を取り入れている。当グループにおいてもサポートブックをもつ小学校低学年の保護者を対象としたペアレントトレーニング事業において、グループワーク形式で参加者交流ができるような構成にしているが、親同士の交流の発展にまで結びつかない、また家族同士の関わりは支援としての評価が難しいといった課題があった。

サポートブックは、本人・家族の希望に応じて交付し、継続支援のツールとすることを目指しているが、家族や本人をサポートするツールとなり得ているか、評価が十分に行えていなかった。他地域においてもサポートブックが家族から園や学校に提示されない、園や学校の職員がサポートブックの必要性を理解していないために、利用されていないといった課題が挙がっており（井上，2013）、第1報で明らかとなった家族支援の課題は、他地域にも共通するものがあると考えられた。

課題解決に向けては、関係機関と共に支援の大きな方向性を検討していくと同時に、既存のサービス資源や支援をどう改善するかの具体策を、各関係機関において取り組みながら検討することが重要であると考える。

本研究の目的は、就学後1年までの時期に焦点を当て、発達障害児の成長発達を支える家族支援のあり方を明らかにすることである。本稿では、第1報で明らかになった家族支援の課題解決に向け、支援に携わる関係者と意見を交わし、支援の方向性や改善の具体策の検討を行った。検討を含めた実践過程を通して、発達障害児の成長発達を支える家族支援の方向性と、保健師の役割を検討する。

Ⅱ．研究方法

1. 家族支援の課題解決に向けた支援の計画・実施・評価

第1報で整理した発達障害児の家族支援における支援上の課題について、筆頭筆者とグループ職員で意見交換した。意見内容をもとに、筆頭筆者が支援案を作成した。支援案をもとにグループ職員と筆頭筆者が協働して支援の計画及び検討を行い、一部については、実施・評価を行った。職員との検討は、逐語録を作成しデータとした。実施した支援における参加者の発言と、事業後の職員とのカンファレンス内容は、筆頭筆者のメモをデータとした。

2. グループ職員学習会の実施と評価

筆頭筆者と保健師が相談し、家族支援の課題解決に必要な内容について、職員対象の学習会を計画・実施した。学習会終了後、無記名式アンケートを用いて意見を聞き学習会の評価を行った。

3. 取り組みの成果の把握

グループ職員間で、支援上の課題解決に向けて具体的な取り組みを検討する過程で得られた成果を把握するため、筆頭筆者がインタビューガイドを作成し、グループ職員及び、グループの所属課長へ聞き取りを行った。質問内容は、「インタビュー・質問紙調査結果から家族支援の課題を検討する過程で考えたこと」「支援Aの計画実施評価に取り組み考えたこと」「支援B・支援Cに取り組み考えたこと」「検討を通して他職員や専門職の意見を聞き考えたこと」「家族支援における当グループ保健師の役割について考えたこと（保健師のみ）」の5項目である。聞き取り内容は許可を得て録音し、データとした。

4. データ収集期間

データ収集期間は、2019年4月～2019年10月であった。

Ⅲ. 倫理的配慮

研究協力者の児の家族と職員に対して、研究目的、方法、協力いただきたい内容、研究協力は自由意思によるものであること、個人情報の保護について文書と口頭で説明し、同意を得た。支援Aは、研修機関の事業の一環として行ったため、事業評価として参加者全員に無記名のアンケートの記入を求め、研究データとしての使用可否について回答を求めた。岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得て実施した。(2018年6月28日、通知番号30-A004M-2)

Ⅳ. 結果

1. 家族支援の課題解決に向けた支援の計画・実施・評価

1) 家族支援の課題解決に向けた意見交換

参加者はグループ職員4名だった。家族支援の課題をグループ職員に提示し、課題解決に向けた支援について意見交換を行った。所要時間は合計90分だった。22の意見内容が得られ、5つのカテゴリが整理された。カテゴリを≪≫で表し、内容を記す。

≪ペアレントトレーニング事業がニーズに合っているかを検討し、参加者同士の関係の継続も目指し改善できるとよい≫といった活動改善に関する具体的な内容は、ペアレントトレーニング事業については多く挙がったが、≪求めていることを確かめて活動を考えたいが、子の状況や家族の思いが十分に分からない≫ために考えづらいという意見も挙がった。筆者から、事業に参加していない家族の状況で捉えていることについて意見を促したところ、≪利用できる資源の情報提供の工夫や強化が必要≫といった課題や、≪サポートブック交付時に全体のニーズを捉えると良い≫といった意図的にニーズを捉える必要性、≪サポートブックを持つタイミングで、家族が主体的になれるような支援が必要≫といったサポートブック交付時期の支援に関する意見が得られた。

2) 課題解決に向けた支援案の検討

1) で得られた5カテゴリを参考に、筆頭筆者が支援A、支援B、支援Cを作成し、グループ職員と家族支援の課題との関連を確認した。家族支援の課題を「」、1) の意見交換で得られたカテゴリを≪≫、グループ職員の意見内容を＜＞で表し、各支援の概要と家族支援の課題との関連を示す。

(1) 支援案Aの検討

≪ペアレントトレーニング事業がニーズに合っているかを検討し、参加者同士の関係の継続も目指し改善できるとよい≫の意見を参考に、既存のペアレントトレーニング事業を通して、「父親・祖父母に理解や協力を促す支援方法の検討」「家族の交流の機会の充実」「家族が子を理解するためのサポートブックやペアレントトレーニングの検討」「家族の思いや現状の把握」を意識して、課題解決へ向かう方法の検討を提案した。グループ職員からは、＜実施しながら参加者家族の状況や思いを意識的に捉えることを目指す＞＜参加者同士の関係の継続も目指して実施する＞＜本事業は、サポートブック活用促進にも関連する＞の意見が得られ、具体的な計画を進めることとなった。

(2) 支援案Bの検討

「家族の思いや現状把握」の解決に向けて、≪求めていることを確かめて活動を考えたいが、子の状況や家族の思いが十分に分からない≫≪サポートブック交付時に全体のニーズを捉えると良い≫≪サポートブックを持つタイミングで、家族が主体的になれるようなサポートが必要≫の意見を参考に、サポートブック交付時の相談支援の充実を提案した。交付時に対象家族の状況を捉え、個別支援の充実を目指すという目的は、グループ職員にも合意が得られた。サポートブック交付は、複数の関係機関で行われているため、本グループ窓口での交付場面におけるモデル的な実施を目指すこととなった。

(3) 支援案Cの検討

≪利用できる資源の情報提供の工夫や強化が必要≫の意見を参考に、家族が発達支援に関する情報を得るための支援について検討し、「父親・祖父母に理解や協力を促す支援方法の検討」「身近な専門職による療育の促しと継続支援の検討」の解決を目指すことを提案した。グループ職員からは、＜家族によって支援を得たいタイミングが違うため、様々な機会に情報が得られることが重要＞＜就学や学校生活に関わる相談先等の情報提供も考えられる＞との意見が挙がり、「就学前後の支援充実」の課題解決にも関わる取り組みとして検討することとなった。

3）支援の計画・実施・評価

支援Aは、課題解決を目指して計画・実施・評価をグループ職員とともに行った。支援B・Cは実施には至らなかったが、意見交換が課題解決に向けた取り組みとなったと捉えたため、その意見交換内容を記す。

(1) 支援Aの計画・実施・評価

①支援Aの計画

事業運営に携わるグループ職員4名、筆頭筆者が参加し、2回に分けて検討した。グループ職員の意見の要約を＜＞、家族支援の課題を「」で表し、課題解決に対し、既存事業をどのように改善するかという点における検討内容を記す。既存事業に追加した内容、支援Aによる家族支援の課題への対応を、表1に示す。

事業目的・目標の検討は、「家族が子を理解するためのサポートブックやペアレントトレーニングの検討」の課題解決に関連すると考え、既存の事業目的や事業対象者について意見交換した。既存の事業目的は『家族が子の特性を理解した対応を身に着ける。児と家族が穏やかに家庭生活を送りながら、ともに自尊心を育めるようにする』と意味内容が大きく、職員により＜参加者が他の人の意見を聞き、自分の子に合った方法を考える力をつける＞＜家庭の中で自己肯定感が育まれるような関わりを目指す＞等、解釈が様々であると分かり、意見内容をもとに、『参加者が自分の子どもに合った方法を考える力、子どもの行動を肯定的に捉える力をつける』『参加者が安心して子どもや家族・自分自身の話ができ、参加者間の交流が継続できる』を、職員間で共有し評価しやすい下位の事業目標として追加した。

事業参加者や対象者については、＜対象を広げたが申し込みは少ないため、ニーズに合っているか確かめる必要がある＞＜参加に至った思いを見てみると、必要な支援が検討できるのではないか＞等の意見が挙がり、対象のニーズに合った事業となっているか参加者の様子を捉え検討する必要があると確認した。

各回の内容について、家族支援の課題解決を目指すための具体的な方法は、表1に示すように、「家族が子を理解するためのサポートブックの検討」に対しては、＜学習会の中で、サポートブックの関連を確認しながら進められると良い＞＜目標達成のためには、本事業に参加して気づいたことや考えを書き出すとよい＞等の意見から、参加者にサポートブックを持参してもらい、活用状況を確認し、活用を促すよう講義内容を工夫すること、参加しての学びや気づきを書き出す時間を設けることを事業計画に追加した。

「父親・祖父母に理解や協力を促す支援方法の検討」については、＜家族の状況は、参加者と職員の個別の関わりで捉えられそう＞等の意見が聞かれ、参加者家族の協力や理解状況を意識的に捉えること、父親や他の家族員と子の関わりの変化を事業評価の視点とすることを計画に追加した。

「家族の交流の機会の充実」については、4回目終了後にフォローアップ会の実施を追加し、フォローアップ会は、家族間の交流の継続を目指すこと、家族同士の交流に対する参加者の思いを捉えるという目的で実施すると職員間で合意した。また、参加者が安心して話ができるかを事業評価の視点として追加した。

「家族の思いや現状の把握」について、参加者から意識的に捉える内容を検討し、サポートブックの活用状況、親同士の交流の機会の有無、母親以外の家族の協力や理解状況を捉え、事後スタッフカンファレンスでの共有を追加した。捉える方法についても検討し、＜参加者との個別のやりとり＞＜グループワークの意見内容＞＜アンケート＞＜参

表1　支援Aによる家族支援の課題への対応（下線は既存の計画）

支援Aで対応する家族支援の課題	課題解決に向けた計画
家族が子を理解するためのサポートブックやペアレントトレーニングの検討	・参加者にサポートブックを持参してもらい、活用状況を確認する。活用を促すよう講義内容を工夫する。 ・参加して得た気づきを書き出し、整理する時間を設ける。 ・各回の評価の視点を明確する。 ・各回終了後にスタッフカンファレンスを実施する。
父親・祖父母に理解や協力を促す支援方法の検討	・参加者家族の協力や理解状況を意識的に捉える。
家族の交流の機会の充実	・参加者が安心して話ができる場とするための雰囲気づくり。 ・4回目終了後、フォローアップ会を開催し、参加者間の関係継続を目指す。 ・家族同士の交流の機会の有無や思いを捉える。
家族の思いや現状の把握	・サポートブックの活用状況、親同士の交流の機会、父親等、母親以外の家族の協力や理解状況について、参加者とのやり取りやアンケートから捉える。 ・職員が捉えたことを、事後スタッフカンファレンスで共有する。

加者同士のやりとり＞が挙がり、参加者へのアンケートの実施を追加した。

②支援Aの実施

本事業は全4回であるが、研究期間の関係上、2回目までを研究データとした。

申込者は7名で、参加者は6名だった。全体の進行をグループ職員2名が担当し、筆頭筆者は進行補助を行った。事業参加者の発言内容の要約及び、事後カンファレンスでの職員の発言内容の要約を＜＞、アンケートの記載内容を〔〕で表し、家族支援の課題解決に向けた計画に対する実施内容を示す。

課題「家族が子を理解するためのサポートブックやペアレントトレーニングの検討」については、参加者から＜苦手なことや気になることはたくさん書けるが、好きなことは思いつかない＞＜第1子のことは分かるが、この子の好きなことがすぐに書けない＞と日々の子どもとの関わりについて、気づきを得ている様子が捉えられた。また、スタッフカンファレンスでは、＜サポートブックと支援機関でもらう資料を整理して活用するのが難しい状況がありそう＞＜サポートブックを学校とのやり取りに活用している人がおり、活用状況をフォローアップ会で共有できるとよい＞とこれまで職員が見ることがなかった活用の実際を捉えることができ、具体的な支援方法を考えることができた。

「家族の交流の機会の充実」については、話しやすい雰囲気づくりとして、席の配置やグループ分けの工夫、参加者の自己紹介方法の工夫を実施した。参加者からは＜子どもの問題ではなく、私の考え方の問題なのかもしれない＞と後悔の思いを交えながらこれまでの子どもとの関りを語る参加者と、共感を伝える参加者の姿が見られた。

「家族の思いや現状の把握」については、終了後にアンケートを行い、職員間で共有し、意見交換を行った。本事業の参加動機について、困っていることがあった3名、チラシが届いた3名の回答があり、困っていることは〔子どもの身支度等、スムーズにできないことが多く、叱ることが多くて気になっていた〕等、子どもとの関わり方についてだった。本事業に参加して子どもとの関わり方で気づいたことは〔褒める大切さ〕〔子どものできることに目を向ける大切さ〕の回答だった。本事業の参加者の交流については、大変良い0人、良い5人で、その理由は〔他の子どもの悩みが聞ける〕〔他の人の意見で考えを見つめ直すことができる〕だった。フォローアップ会の参加希望は、参加したい3名、どちらとも言えない2名であった。サポートブック活用状況は、よく使っている0名、たまに使っている4名、使っていない0名であった。たまに使っている人の活用方法は、〔気づいたことを記入したり、診察のときに使用している〕〔懇談等のときに話す内容をまとめるために見直す〕等だった。本事業でのサポートブックの活用の説明については、6名が気づいたことを記録し、自分なりに活用しようと思ったと回答していた。

③支援Aの評価

各回終了後に、参加者の感想やアンケート記載内容を確認しながらスタッフカンファレンスを実施した。各回の事業目標に対する評価を職員間で確認しながら、筆頭筆者が進行した。意見内容の要約を＜＞で示し、評価内容を記す。

1回目カンファレンスでは、＜話しやすい雰囲気、参加者間の交流を工夫した＞＜感想の記載は参加者の振り返りにもなっていた＞の意見が挙がり、参加者が自身の子どもの状況を振り返り、参加者が安心して話ができ、1回目の目標は達成できたと確認した。改善や工夫が必要な点として、＜交流の時間を長くとれるとよい＞が挙がり、2回目以降の講義内容を整理し、参加者間の交流を確保することとなった。

2回目カンファレンスは、＜話しやすい雰囲気で、参加者間の交流も見られた＞＜仲間づくりとして大切なのは、参加者の母親が自分自身の話ができること＞といった意見が得られ、次回以降の計画への追加を検討した。また、＜サポートブックを整理して使うことが難しい可能性がある＞＜母親たちは、専門性の高いことではなく、実際の子どもとの関わりに生かす方法を求めている＞等、個々の職員が捉えたサポートブック活用状況や参加者のニーズを共有した。フォローアップ会については、アンケートで参加者の思いを捉えたことで＜フォローアップ会に向けて家族間の交流に対する参加者の思いをさらに捉える必要がある＞とスタッフ間で共有した。

(2) 支援Bの計画

グループ職員とともに、支援Bの目的を明確にするアンケート項目や実施方法を検討しサポートブック交付時の実施を目指すため、筆頭筆者が作成したアンケート案を資料として意見交換を行った。支援Bは、家族支援の課題「家族の思いや現状の把握」解決に向けた取り組みであるとともに、その他の課題解決にも向かうため、アンケート項目として、

課題に関連した内容（身近な専門職との関係、療育機関の利用、子の成長発達に関する父親の理解・協力状況、同じ悩みをもつ親同士の交流、サポートブック交付の経緯）を捉える内容を挙げた。

検討は2回実施し、グループ職員4名が参加した。意見内容の要約を意味内容のまとまりで集約できたものを、カテゴリ≪ ≫で示し、支援Bの計画内容を記す。

支援場面となるサポートブック交付の現状は、≪複数の関係機関で交付されており、多くの職員が関わる≫、サポートブック交付に至った経緯は≪児童発達支援の利用手続き時が多く、家族の希望よりも支援者・専門職から勧められるケースが多い≫≪支援者から勧められ、よく分からないままサポートブックの交付に来ている家族もいる≫と、交付時の家族の思いや状況は捉えられる場合もあるが、はっきりしないケースもある、支援者から勧められ、よく分からないまま交付申請に来ている家族がいるといった現状が整理できた。

支援Bの目的やアンケート内容は、≪家族が必要な支援は、回答者が考えやすい表現を工夫する必要がある≫≪相談支援専門員との関わりも捉える必要がある≫等の意見が得られた。また、≪アンケート結果をどう活用するか≫の疑問が挙がったため、活用方法を検討した。≪現行の事業の改善や、支援者との協働に生かす≫≪個別支援に生かすには記名や年齢の記載について検討が必要≫の意見も挙がり、活用方法も含め、さらなる検討が必要と考えられた。実施の方向性については、≪他機関での実施は難しい≫≪グループの活動で試験的に実施する≫≪実施しながら項目を修正する≫の意見が挙がった。アンケートの活用方法や、この時期に家族が抱える不安に寄り添う支援となり得るか、さらに検討が必要であることから実施は見送られたが、サポートブック交付時の支援充実は重要であるとの意見が挙がり、引き続きの課題となった。

(3) 支援Cの計画

計画検討参加者は、グループ職員4名で、検討時間は45分だった。得られた意見を要約し、意味内容のまとまりで集約できたものをカテゴリとした。要約＜ ＞、カテゴリ≪ ≫で示し、検討内容を記す。

筆頭筆者が支援案と家族支援の課題の関連を示し、発達障害児を育てる家族への情報提供の必要性について、グループ職員に意見を求めた。≪サポートブックの活用促進には、資源の情報提供が必要≫が挙がったため、既存の情報提供方法について意見交換した。サポートブック交付時には、主に口頭での情報提供を行っていること、市の子育て支援部署で作成している子育て支援ガイドは、乳児全戸家庭訪問で全家庭に渡しているが、発達支援に関する掲載内容はごく一部であり、既存の子育て支援ガイドでは詳しい内容は分からないと確認した。また、サポートブック交付時に発達支援に関する情報提供が行われている他市町村の取り組みを、筆頭筆者から資料を示しながら紹介した。参加者からは≪家族が資源を知り、家族も学び考える必要が伝わるツールになるとよい≫≪就学に関する情報も載せることで、家族が先を見て考えるためのサポートとなる≫≪対象者・支援者、誰もが参考になるものがあるとよい≫等の意見が得られた。また、参加したグループ職員からは、情報提供の充実について引き続き考えたいとの意見が聞かれた。

2. グループ職員学習会の計画・実施・評価

家族支援の課題解決に必要な学習内容を保健師と相談した。保健師からは、特に必要を感じている課題「家族の交流の機会の充実」に関連することが良い、支援Aに生かせる内容が良いとの意見を得た。そこで「家族の交流の機会の充実」の課題解決に関連した学習会を行うこととした。アンケート記載内容〔〕、参加者した職員の発言の要約を＜ ＞とし、学習会の計画・実施・評価について述べる。

1) 職員学習会の計画

学習会の企画に向けて、①家族同士の交流に携わる中での疑問、②親同士の交流に関わる事業計画・事業評価に関する疑問について、グループ職員にアンケートを行った。アンケート結果より、〔親同士での話し合いが進んでいる中でのスタッフの介入の仕方について知りたい〕等の意見が得られ、職員らは、家族同士の関係づくりの促し方に疑問や難しさを感じていると分かった。事業計画・評価については、〔子の年齢や親の理解など、住民のニーズに対応できているか〕〔事業評価の視点としてのアンケートの内容〕等の意見が挙がった。これらの結果をもとに、家族同士の交流の意味と、交流会やグループワークの評価について考える機会となるよう、保健師と筆頭筆者が相談して計画した。

2) 職員学習会の実施

学習会は、支援A計画1、2回目の間の時期に実施した。グループ職員4名が参加し、所要時間は45分間だった。「親同士の交流の意味や影響に関する学習」と「親同士の交

流会をニーズに沿って行うための事業計画と評価」について、親の交流の経験が記されている文献（松井ら，2016）と筆頭筆者が作成した資料を用いて、親同士の交流の意味、意味あるものにするために支援者としてできることを伝えた。その後、支援Aにおいて家族が交流する目的について意見交換を行った。

3）職員学習会の評価

学習会終了後に参加者に対して行ったアンケートと、学習会での意見交換内容を用いて学習会の評価とした。

アンケートは、参加者4名中2名から回答が得られた。今後の活動に生かせることとして〔何気なくやっていたことの振返りができた〕〔親同士の仲間意識や集団で学ぶことを意識して事業を進めたい〕との意見が得られた。意見交換では、＜グループワークは、事業を効果的に進める方法と捉えていたため、親同士の交流や関係性の深まりは重視していなかった。他の職員はどう考えるか＞と投げかけがあり、＜集まって行うので、結果的に関係性が作られることもある＞＜参加者間の学び合いを大切にしている＞＜親同士の関わりで得られることは多いため、関係作りも大切に考えている＞との意見が出され、家族支援の課題「家族の交流の機会の充実」と支援Aとして計画中の既存のペアレントトレーニング事業との関連について、職員により意識が異なっていたと分かり、検討する機会となったと考えられた。

3. 取り組みの成果の把握

第1報の家族のニーズから家族支援の課題を整理する過程と、第2報の課題に対して支援を計画・実施する過程の一連の取り組み成果を把握するため、グループ職員およびグループの所属課長を対象に聞き取りを行った。聞き取り時間は、15～30分だった。質問項目と意見内容を表2～6に示す。質問項目ごとに逐語録を作成し、1つの意味内容が読み取れる記述を要約し、要約を意味内容の類似性に沿って集約しカテゴリとした。カテゴリを≪≫で結果を示す。

1）家族支援の課題を検討する過程で考えたこと

第1報の発達障害児の家族のニーズを捉え、家族支援の課題を検討する過程に参加した職員4名に聞き取りを行った。6つの意見内容が得られ、表2に示すように≪家族支援の必要性や支援の視点を考えられた≫等の3カテゴリに分類された。

2）課題解決に向けた支援Aの取り組みについて

支援Aの取り組みの成果を確認するため、支援Aの計画実施評価に参加した職員4名に聞き取りを行った。11の意見内容が得られ、表3に示すように≪事業目標に対して、意識して取り組む大切さを考えた≫≪参加者の求めていることや変化を捉えながら支援方法を考えることができた≫等の4カテゴリに整理された。

支援Aについて、家族支援の課題解決に向けて取り組むために今後必要なことは、8つの意見内容を得て、≪全体への支援と個別支援を組み合わせて個々の参加者が抱える課題に対応する≫≪参加者主体の活動になるとよい≫≪サポートブックの活用促進の視点を、他の事業でも取り入れる≫の3カテゴリに整理された。

3）課題解決に向けた支援B・支援Cの取り組みについて

支援B・Cの計画で考えたこと及び、今後必要なことは、この過程に参加した職員5名に聞き取りを行った。12の意見内容を得て、表4に示すように≪幅広い年代の実態やニーズを捉えるために、活動を組み合わせ、対象に歩み寄る≫≪サポートブック交付時に必要な支援、職員のスキルアップについて検討が必要≫等、4カテゴリに整理された。

4）多職種で意見交換しながら支援を検討した成果について

研究開始時のグループでは、捉えたことを職員間で共有し、必要な支援を検討する機会を持つことが課題となっていたために、意見を交わしながらの検討を大切に取り組みを進めた。これに対する評価として、他の職員や専門職との検討から考えたことについて聞いた。6名から9つの意見内容を得て、表5に示すように、多職種で話すことで、≪対象や家族の将来的な課題を想定でき、より良い方法を考えられた≫等の3カテゴリに整理された。

5）保健師の役割として考えたことについて

取り組みを進める中で、当グループにおける保健師の役割が話題に挙がり、保健師は取り組みながら、自身の専門性や役割について考えていると捉えた。そのため「本研究に取り組み、家族支援における保健師の役割について考えたこと」を保健師に聞き取りを行った。表6に示すように、3つの意見内容が得られ、≪必要な関係機関とともに支援する≫≪幅広く対象の状況や、問題の背景を捉え、支援の方向性を考える≫の2カテゴリに整理された。

表2　インタビュー・質問紙調査から家族支援の課題を検討する過程で考えたこと

カテゴリー	意見内容要約の例
家族支援の必要性や支援の視点を考えられた	身近な支援者や専門職による関わりの積み重ねが、母親の支えになっていると分かった / 家族支援がメインの取り組みには違和感があったが、母親たちの抱える悩みや葛藤に触れ、家族支援の必要を考えた
窓口対応時の関わりで、家族背景や必要な支援について考えるようになった	インタビューから、それぞれの家族の歴史があることを意識して、普段の窓口業務でも対応するようになった
事業ベースではない支援の検討ができた	職員間での話し合いが、事業ベースのありきたりな作業でなく、多角的な見方や振り返りができた

表3　支援Aの計画実施評価から大切だと思ったことや考えたこと

カテゴリー	意見内容要約の例
事業目標に対して、意識して取り組む大切さを考えた	参加者が安心して話ができること等の目標に対して、支援者としてできることを考えていく大切さを感じた / 各回の目標に合わせて取り組み、目標を意識することが大切
参加者の求めていることや変化を捉えながら支援方法を考えることができた	アンケートで参加者の思いを知り、専門性の高い内容を求めているわけではないと分かったので、それに合わせて進め方を考えられた
家庭での親子の姿や参加者の視点を意識できた	当初は不安を感じていた主担当の職員が、参加者目線に立って取り組めた / 家庭での親子の姿を意識しながら事業ができた
必要な内容を積み上げて事業を実施できた	必要なことを一つずつ積み上げていき事業を実施するという本来の姿があり、より良いものになった

表4　支援B・支援Cの計画から大切だと思ったことや考えたこと

カテゴリー	意見内容要約の例
幅広い年代の実態やニーズを捉えるために、活動を組み合わせ、対象に歩み寄る	児や家族の状況を捉えるアンケートはしていないが、他の事業と組み合わせることで学童期の親の関心を捉える活動になる / 個別のニーズの把握には、話しやすい状況を作り、対象に歩み寄って引き出すことが必要 / サポートブック交付時のアンケートもガイドも個別支援のツールと考えられる
サポートブック交付時に必要な支援、職員のスキルアップについて検討が必要	サポートブック交付時は、アンケート形式ではなく、母親の不安を救うことを優先すべきだと思った / サポートブック交付時の家族への支援として、職員のスキルアップが必要 / 対象の状況を捉えることは今後の課題である
情報提供は、方法の見直しと目的の明確化が必要	ガイドを用いた支援は、保育・教育・医療と連携する必要がある / 既存の情報提供の方法の見直しも含め、何を支援するかを明確にする必要がある
サポートブックの活用促進には、ブック自体の検討が必要	サポートブックの活用促進として、現場の保育士や学校教員から活用を促すには、分かりやすさや書きやすさの工夫が必要。また、親にとってもサポートブックが使いにくい可能性がある

表5　他の職員や専門職との検討から感じたことや考えたこと

カテゴリー	意見内容要約の例
対象や家族の将来的な課題を想定でき、より良い方法を考えられた	多職種で話すことで、対象や家族の多様な悩みを拾うことができ、将来的に出てくる課題を想定できると感じた
対象全体を見て課題を考える難しさを感じた	子どもだけでなく、家族も見ていく必要があると分かったが、家族の理解状況は様々であるために、全体を見て課題を考えていく難しさを感じた
多職種が配置されている意味を再認識することが課題と感じた	グループの立上げから何年も経ち、多職種がいることが当たり前になっていたが、多職種でやっている意味を再認識することがこれからの課題だと感じた

表6　家族支援における当グループ保健師の役割について考えたこと（保健師のみ）

カテゴリー	意見内容要約の例
必要な関係機関とともに支援する	身近な支援者の存在が母親にとって大きいことが改めて分かり、子どもや家族にとって必要な関係機関を捉え、一緒に支援していけるように働きかけることを大切にしている
幅広く対象の状況や、問題の背景を捉え、支援の方向性を考える	ケースによって、子どもよりも親や家族に支援が必要な状況もある。家族全体を捉え、支援の方向性を考え、コーディネートする役割がある。

Ⅴ．考察

1．発達障害児の成長発達を支える家族支援の方向性

本取り組みでは、家族支援の課題解決に向けて、支援Ａの計画・実施・評価と、支援Ｂ・支援Ｃの検討を行った。その過程から示唆された家族支援の方向性について述べたい。

1）療育開始前後に家族の状況を丁寧に捉え支援できる体制

Ｘ市では、当グループをはじめ複数の関係機関において、療育開始前後の時期に、サポートブックを交付するケース

が多い。この時期は、子の障害を受け入れ難く感じつつも、育てにくさの要因に納得する思いを抱いたり、子に対する理解を深め学ぶ機会を求める（堀ら，2021）など、家族が子どもの成長発達に向き合うタイミングであり、他地域においても障害福祉サービス受給手続きや、保健部門の保健師による継続支援で、家族と専門職が関わりを持つ重要な時期である。サポートブック交付時の個別支援（支援B）と情報提供の強化（支援C）の検討を通して、この時期における家族との丁寧な関わりの重要性が考えられた。

支援Bにおいて、支援者から勧められるがまま児童発達支援利用やサポートブック交付を申請する家族もいる状況が共有され、サポートブック交付時の家族の思いや発達支援への理解状況はケースによって大きく異なっていると分かった。そのような現状に対して、サポートブックを持つタイミングで、家族が主体的に子の成長を考えられる支援や、家族の不安を救うことを優先すべきとの意見が挙がり、家族の思いや状況を意識的に捉えることが、子どもや家族に応じた支援のきっかけとなると考えられた。このような時期の支援は、保護者が子どもの発達障害を受け入れられる状況づくりと、発達障害児の親になったことを受容できる時間が必要であり（子吉，2010）、子どもの障害に向かう保護者の今をアセスメントし、分かりやすい提示を行うことが安心感を提供することにつながる（子吉ら，2013）とされている。本取り組みでは、成果の把握において、サポートブック交付時に関わる職員のスキルアップが必要との意見が挙がった。このことから、サポートブック交付や療育開始前後に関わる関係機関の職員や支援者が、その機会を活用して家族の思いを引き出す関わりをすることが重要であり、そのためには、家族の現状を丁寧にアセスメントできる体制や職員のスキルアップが、家族が抱える生活上の課題や子どもに対する思いに応じた支援の方向性として考えられた。

2）家族間の交流を意図した支援を検討する機会

支援Aでは、課題「家族の交流の機会の充実」の解決を目指すために、参加者同士の関係性の発展を視野に入れ、スタッフ間で参加者が安心して自分や家族の話ができることを事業目標と評価の視点として追加した。その結果、職員間で事業目標を共通認識して実施でき、参加者が子どもへの思いを語る姿や、共感を伝え合う姿が見られ、支援Aにおける家族間の関わりが、家族が子どもとの関係を振り返り、今後を考える機会となったと考えられた。グループ職員学習会において、＜グループワークは、事業を効果的に進めるための方法と捉えていたため、親同士の交流や関係性の深まりは重視していなかった＞というように、支援計画段階では、本事業における家族間の交流に対する認識が職員によって異なっていたが、支援A実施後には＜仲間づくりとして大切なのは、参加者の母親が自分自身の話ができること＞＜参加者同士の関りから悩みを解決するヒントが得られている＞との考えが得られていた。発達障害児の家族支援において、家族が親の会や同じ悩みを持つ人のグループに参加したり、繋がりをもつことは、悩みや苦悩を共感し（柳澤ら，2017）、育児のロールモデルが得られる（松井ら，2016）点で重要であることが明らかになっており、X市では、関係機関の支援においても親同士の交流を意図した取り組みがなされているが、第1報の質問紙調査で捉えたように、家族同士の交流の機会がない家族がいる実態もある。今回の結果から、既存事業において家族の交流を意図した支援ができるか、職員間で検討すること自体が「家族の交流の機会の充実」の課題に対する具体的な取り組みであったと考えられた。事業目的・目標との関連や、事業における家族同士の交流に対する考えを携わる職員間で検討すること、捉えた家族の姿や職員の考えを伝え合う時間を設けることが重要であり、他事業や他機関の既存事業においても、家族間の交流を意図した支援の重要性について確認し、既存事業をどう工夫するか検討する機会により課題解決に向かえると考えられた。

2. 家族支援における保健師の役割

本取り組みは、事務職員、保育士、臨床心理士、保健師等、支援に携わる職員が意見を交えて検討することを大切に、筆頭筆者が保健師の役割を担った。第1報で、職員から一部の家族から捉えたニーズと支援体制全体を考える当グループの活動との関連に対する疑問が出された場面では、保健師とともに一部であってもニーズに沿った支援の振り返りの必要性を確認したことで、成果把握では、グループ職員が対象家族の将来的な課題を想定できたとの成果や、対象全体を見て課題を考える難しさを感じたと新たな課題を認識できた。また、課題「家族の思いや現状の把握」に対し、支援Aでは、事業参加者から捉えたい内容を検討し事業計画に追加した。支援Bでは、サポートブック交付時に家族の状況や思いを引き出し、個別支援の充実を図る方法を検討した。「家族が子を理解するためのサポート

ブックやペアレントトレーニングの検討」「家族の交流の機会の充実」に対しては、既存事業で目指すことを明確にして実施した。結果として≪事業目標に対して、意識して取り組む大切さを考えた≫≪幅広い年代の実態やニーズを捉えるために、活動を組み合わせ、対象に歩み寄ることが大切≫というように、職員間で課題を意識して既存事業の目的・目標を検討することで、課題解決に向けた具体的な取り組み方法を見出すことができたと考えられた。

これらの取り組みは、「個」の健康課題に対応しながら共通する課題を持つ複数の事例を並べて実態把握する（守田ら，2019）、住民や組織への働きかけによる反応等から必要な情報収集をする（宮崎ら，2019）等、保健師活動の原則的な方法や視点を生かした活動だったと考える。

発達障害児を育てる家族のニーズは、子の成長発達の時期による特徴や、家族員の生活と子育ての困難さが関連する複雑な背景がある（堀ら，2021）うえに、児の発達特性に合わせた専門的な支援が求められるため、支援者には、家族全体をアセスメントする視点と、家族へ専門的な助言ができる技術が必要である。既存事業を改善しながら発達障害児家族のニーズに応えるには、保健師の原則的な機能を生かし、常に対象家族の生活を捉える視点を持ちながら、多様な専門性を持つ支援者の考えを引き出したり、携わる多職種の意見を整理し、検討の方向性を示す役割が保健師には重要であると考える。

3. 家族支援の課題に対する取り組みの評価と今後の課題

第1報（堀ら，2021）で明らかになった家族支援の課題について、本研究での対応を評価する。

支援Aでは、「家族が子を理解するためのサポートブックやペアレントトレーニングの検討」「家族の交流の機会の充実」の他に、「父親・祖父母に理解や協力を促す支援方法の検討」にも取り組んだ。これは、第1報において、父親へ直接関わる機会が少なく、父親が子の特性を理解する過程が分からないために支援が難しいとの課題であった。支援Aを通して、成果の把握では≪家庭での親子の姿や参加者の視点を意識できた≫と、参加者である母親の背景にいる父親の存在を意識して事業を実施できていた。

支援Bは、「乳幼児期からの継続支援体制づくり」「相談支援専門員による支援の現状把握」「身近な専門職による療育の促しと継続支援の検討」「就学前後の支援充実と学校への働きかけの継続」等、複数の課題について「家族の思いや現状の把握」を目的に検討した。実践には至らなかったが、職員間の検討において、家族の思いや現状を把握し、≪現行の事業の改善や、支援者との協働に生かす≫といった、どのように実践に繋げるかについて職員間で必要性を検討することができたと考える。

支援Cは、既存の情報提供について振り返って検討したことで、≪情報提供は、方法の見直しと目的の明確化が必要≫と、職員らは新たな課題を感じていた。

本研究では、家族支援の課題と関連した支援の現状について職員間での意見交換や、既存事業で参加者の現状や思いを捉えるといった実態把握が主な取り組みであった。また、グループの職員間のみの取り組みであった点から考えても、課題解決に踏み出したばかりの状態であると言える。今後は、捉えた実態を関係機関も交えて共有・意見交換し、新たに捉えた事実から、さらに支援上の課題を整理していくことが必要である。

謝辞

本研究にご協力をいただきましたご家族の皆様および、職員の皆様に深く感謝申し上げます。本論文は、岐阜県立看護大学大学院看護学研究科修士論文の一部に加筆修正を加えたものである。

本研究における利益相反はない。

文献

堀里奈，北山三津子．(2021)．発達障害児の成長発達を支える家族支援のあり方 その1 家族のニーズに沿った家族支援の課題．岐阜県立看護大学紀要，21(1)，61-71.

井上和久．(2013)．サポートファイルの活用と普及への課題と対応に関する一考察～A市の保健センター，療育機関，特別支援学校が連携した取り組みから～．小児保健研究，72(1)，65-71.

松井藍子，大河内彩子，田髙悦子ほか．(2016)．発達障害児をもつ親の会に属する母親が子育てにおける前向きな感情を獲得する過程．日本地域看護学会誌，19(2)，75-81.

宮﨑美砂子，北山三津子，春山早苗ほか．(2019)．最新公衆衛生看護学総論(第3版)(pp.121-125)．日本看護協会出版会.

守田孝恵，磯村聰子，木嶋彩乃ほか．(2019)．PDCAの展開図でわかる「個」から「地域」へ広げる保健師活動(改訂版)(p.4)．クオリティケア.

子吉知恵美.(2010).就学前の発達障害児の支援体制について－継続支援のための一考察－,石川看護雑誌,7,45-57.

子吉知恵美,田村須賀子.(2013).発達障害児の保護者の発達障害に対する受容状況および発達障害児とその保護者への保健師による援助方法.家族看護学研究,18(2),83-94.

柳澤亜希子,内田照雄.(2017).自閉症児・者の地域生活支援及び家族生活に関する家族のニーズ.国立特別支援教育総合研究所研究紀要,44,57-71.

(受稿日 令和3年8月25日)

(採用日 令和4年1月 5日)

Family Support Methods for the Growth and Development of Children with Developmental Disabilities and to Meet Family Needs (Part 2): Pursuit through Practice to Solve Family Support Issues

Rina Hori and Mitsuko Kitayama

Community-based Fundamental Nursing, Gifu College of Nursing

Abstract

This study aims to clarify the process of providing family support for the growth and development of children with developmental disabilities by focusing on a period up to the first year of schooling and implementing support that meets familial needs. It also examines the role of public health nurses and the nature of family support that promotes such growth and development among children with developmental disabilities in X city.

Based on the authors' previous research analysis, areas of support were planned, implemented, and evaluated together with the department's staff responsible for addressing the "issues of family support."

An interview survey was conducted with the staff to examine the effectiveness of the parent training program. Based on the five perspectives identified, including the importance of program improvement to enhance the continuity of relationships between participants and the inadequate comprehension of the conditions of children and the thoughts of parents, the following measures were devised: improvement of the parent training program (Support A), enhancement of individual support when handing out the support book (Support B), and strengthening the provision of information on developmental support (Support C). After the implementation of Support A, the results confirmed that relationships were created among the participants, and individual staff were able to capture the living conditions of the participants and their families. Interviews with the group staff indicated that they considered supporting the participants while capturing their needs and changes. Issues such as the need to further consider the support needed when delivering the support book were also identified.

The role of public health nurses is to understand the background of the families' difficulties, support the family as a unit, and utilize the perspectives of support from different specialties of multiple professions. In terms of family support, creating a system to carefully understand and support a family's situation before and after the start of medical treatment and education is a future objective.

Key words: children with developmental disabilities, supporting families, family support issue